

氏 名	た 丹 わ 羽 ひろ 博 ゆき 亨
授 与 学 位	工 学 博 士
学位授与年月日	昭和 60 年 10 月 9 日
学位授与の根拠法規	学位規則第 5 条第 2 項
最 終 学 歴	昭和 41 年 3 月 東北大学大学院工学研究科建築学専攻 修士課程修了
学 位 論 文 題 目	日蓮教団寺院の伽藍と建築に関する研究
論 文 審 査 委 員	東北大学教授 佐藤 巧 東北大学教授 筧 和夫 東北大学教授 和泉 正哲

論 文 内 容 要 旨

親鸞によって代表される浄土宗、道元によって代表される禅宗、および日蓮教団の鎌倉新仏教は日本文化形成の重要な構成要素ともなっている。

このような重要な史的現象である鎌倉新仏教に関する宗教学・歴史学の立場からの研究は実に多い。しかし、建築史学の立場から見ると鎌倉新仏教のうち、禅宗寺院についてはかなりの研究の蓄積もあって、遺構と文献面の総合化もなされ大系化への道がひらかれ、次いで浄土宗寺院に関する研究についてもかなりの数となっている。しかし、日蓮教団寺院については十分に体系化がなされていない。

本研究はこのような現状のもとで鎌倉新仏教のうち、日蓮教団寺院をとりあげ日蓮の教義・行儀と伽藍観に基づいて、日蓮教団寺院の伽藍（建築群）と建築の特質を明らかにし体系化することを目的としている。

1 章 序 論

日蓮教団寺院における伽藍と建築について体系的に明らかにするために、日蓮教団について考察し、日蓮教団の概要と本研究の構成について述べた。さらに本研究と関連する研究を通覧し、本研究の目的に対して不十分と考えられる点について述べている。

2章 日蓮の伽藍観と初期日蓮教団寺院の成立過程

本章では、伽藍配置の拠り所となった日蓮の曼荼羅の形態と立体的配座、ならびに日蓮の教義・行儀の考察を通じて日蓮の伽藍観を明らかにし、さらに弟子たちが日蓮の伽藍観を様々に継承し初期日蓮教団寺院の伽藍へと発展した背景について考察した。

その結果、曼荼羅の形態の特徴は相対応する二つのものを対比的に配しその立体的配座は北の上座と南の下座からなっていること、日蓮は大曼荼羅を弟子たちの弘教の拠点に安置すべく授与したこと、比叡山延暦寺の戒壇に対して本門の戒壇を建立する意図があったこと、守護神として諸天善神・十羅刹女と天照・八幡の二神を特に重視していたこと、および日蓮は行儀の場として身延山に大坊・小坊を建立したこと等を明らかにした。そして、各地の弟子たちは日蓮から授与された大曼荼羅を坊ないしは持仏堂に安置していたが日蓮歿後諸形態の本尊が造立され、御影堂が建立されることによって初期日蓮教団寺院の伽藍の性格の基盤を形成するにいたった過程について言及している。

3章 日蓮宗本山寺院の伽藍と建築

本章では日蓮宗に属する18箇本山寺院における伽藍と建築について体系的に解明した。

その結果、伽藍配置の構成としては本堂中心的伽藍配置の構成と祖師堂中心的伽藍配置の構成との2タイプに大別でき、前者は日蓮から大曼荼羅が授与された本山寺院に見られ、後者は身延山久遠寺、池上本門寺、霊跡本山寺院に見られる。

伽藍中枢の主要堂宇の配置には三堂形式（本堂、祖師堂、守護神堂）、両堂形式（本堂、祖師堂）、一堂形式（本堂ないしは祖師堂）がある。本堂と祖師堂の両堂の配置方法は、正面に向かって見た場合本堂を左側、祖師堂を右側に配し、大坊の位置は正面に向かって右側に配した本山寺院が多い。

本堂中心的伽藍配置の本山寺院においては、中世末期以降両堂のうち本堂の大堂化がなされ、祖師堂中心的伽藍配置の本山寺院においては祖師堂の大堂化がなされ、様式的には禅宗様が見られる。

日蓮宗本山寺院の守護神堂は大寺ほどその数が多く、仏教固有の神を祀る三光堂、十羅刹堂は寺院建築の形式であり、日本固有の神を祀る番神堂等は神社建築の形式である。

日蓮および直弟子たちは弘教の拠点として坊を構えていた。その後、坊内の行儀の場たる持仏堂は方丈・客殿と称する独立堂宇へと発展し、さらにその後、方丈・客殿の大堂化がなされ、大方丈・大客殿と呼称されるようになった。その平面形態は六間取りへと発展していることを解明している。

4章 法華宗本山寺院の伽藍と建築

本章では、法華宗に属する本山ないしは本山格の13箇本山寺院における伽藍と建築について体系的に解明した。

その結果、日蓮宗本山寺院と同様に2タイプに大別することができるが、法華宗においては本堂と御影堂の両堂を二而不二、すなわち二つにして二つならずの関係にしているがために、本堂と御影堂の両堂の配置方法は日蓮宗本山寺院とは逆に正面に向かって見た場合、本堂を右側、御影堂

を左側に配し、大坊の位置は左側に配した本山寺院が多くなっている。その後、大堂形式の御影堂を兼ね備えた本堂が建立され、一堂形式の本山寺院が多くなっていることを明らかにした。

伽藍中枢の主要堂宇は日蓮宗本山寺院と同様に三堂形式、両堂形式、一堂形式が存在しているが、法華宗本山寺院の守護神堂は日蓮宗本山寺院とくらべその数は少ない。日、月、明星等の諸天善神を祀る天堂（三光堂）を伽藍中枢の主要堂宇として配している本山寺院が多いが、この三堂形式は三時の勤行から派生したものである。本堂と御影堂の大堂化の時期は中世末期から近世初期で、平面形態から見ると脇陣、後門が設けられるようになり、様式的には禅宗様は見られず和様が多い。

法華宗本山寺院には日蓮宗本山寺院に見られない開山堂があり、これは歴代貫主の供養塔たる木製の五輪塔の場合と本山寺院の開山の木像を祀る場合とがある。また、貫主が居住する大坊内の客殿は、住持（僧侶）のための堂宇で方丈形式となっていることを解明している。

5章 京都日蓮教団本山寺院の伽藍と建築

本章では、京都日蓮教団に属する16箇本山寺院における伽藍と建築について体系的に解明した。その結果は次のようである。

伽藍軸線について見ると京都日蓮教団16箇本山寺院のすべてが本堂を貫いており、また、本堂と祖師堂の両堂の規模は本堂の方が大きく、本堂中心的伽藍配置の構成となっている。しかし、京都妙覚寺と京都要法寺においては、その後祖師堂の大堂化がなされ、京都日蓮教団本山寺院の中には特異な存在となっていた。

伽藍中枢の主要堂宇は本堂・祖師堂・刹堂の三堂形式が多く、その配置方法は鼎立と併置の構成が基本的である。本堂は7間堂ないしは5間堂が多く、この大堂化は近世初期に成立したものと考えられる。それに対して祖師堂は3間堂が多い。

守護神堂のうち仏教固有の神たる十羅刹女（鬼子母神）を祀る刹堂（鬼子母神堂）は寺院建築の形式であり、日本固有の神たる三十番神を祀る番神社は神社建築の形式となっている。日像によって取り入れられた三十番神信仰は番神社として京都日蓮教団寺院に悉く建立されるに至っている。

本坊（大坊）の中心的堂宇たる客殿（方丈）については、日蓮宗と法華宗本山寺院との差異は見いだされなかった。

6章 日蓮教団檀林の伽藍と建築

本章では日蓮教団における教学の場たる中世の談所、学室、近世の檀林の伽藍と建築について体系的に解明した。その結果は次のようである。

檀林の伽藍配置方法は本山寺院のように教義に則って配されてはならず、身分の上下関係、すなわち格式を重視した伽藍配置の構成となっている。

基本的伽藍配置は本山寺院の仏の空間たる本堂、祖師堂を除いた住持（僧侶）の区域たる大坊、坊によって構成されている。そして、檀林の中心的堂宇たる講堂としては大坊内の客殿を、化主の次席たる玄能が居住する玄能寮と学頭寮としては本山寺院の支院の坊舎を転用したものであることを明らかにした。

講堂の平面形態は近世の初頭に成立していた六間取りを基本として、3種類が存在し、玄能寮と学頭寮の平面形態は本山寺院の支院の坊舎と同様に客殿と庫裡とに区別されている。談合場と食堂の室内は室中の構成になっていることから、行儀の場でもあった。

檀林の守護神堂は妙見社が多く、玄義部以下の所化寮は長屋形式の堂宇であることを解明している。

7章 本論文の結論

以上を総括し、本論文の結論を述べている。

審査結果の要旨

日蓮教団寺院における伽藍配置及び建築に関しては、従来僅かな事例研究があるにとどまり、一貫した建築史学的研究は行われていない。著者は日蓮教団における全本山寺院及び教学施設について、遺構、文献、伽藍古図等を用い、日蓮の伽藍観を基本として類型化を行い、その全容を体系的に明らかにした。本論文はそれらの成果をまとめたもので、全文7章より成る。

第1章は序論である。

第2章は日蓮の教義、行儀の考察を通じて日蓮の伽藍観を明らかにし、更に弟子たちが日蓮の伽藍観を様々に継承して、初期日蓮教団寺院の伽藍の性格の基盤を形成するに至った過程を実証的に明らかにした。これらは注目すべき成果である。そしてこれらの成果に基づき、日蓮教団を構成する日蓮宗寺院、法華宗寺院と、さらに両派に係りなく京都に集中する京都日蓮教団寺院との3系列に別けて考察すべきことを提示している。

第3章は日蓮宗本山寺院を対象として、その伽藍配置は本堂中心型と祖師堂中心型との構成に分類され、前者はその後本堂と祖師堂のうち、本堂が大堂化され、後者は祖師堂が大堂化されていることを明らかにした。また様式的には「禅宗様」が採用されていることを指摘している。

第4章は法華宗本山寺院を対象とし、法華宗寺院においては本堂と祖師堂が「二而不二」の関係に置かれているが為に、その後一堂化され、伽藍の中心的位置を占めるに至った過程を明らかにしている。また様式的には「和様」が多く採用されていることを指摘している。

第5章は日蓮宗、法華宗を問わず、とくに地域的、伝統的影響を強く受けた京都教団寺院について考察したもので、16箇の本山寺院のすべてが本堂中心型の伽藍配置の構成をとり、その後も祖師堂の大堂化はなされなかったことを明らかにしている。また様式的には日蓮宗、法華宗ともに本堂、祖師堂の外部には「和様」ないし「折衷様」を、そして内部には「禅宗様」を採用していることを指摘している。

第6章は日蓮教団における教学の場である中世の談所、学室および近世に創設された檀林について、その伽藍の配置計画と建築形態とを解明したものである。伽藍配置は本山寺院のように教義に則ったものではなく、講堂を中心とし、その他の学寮等は格式を重視した配置方法によっていること、また檀林の主要建築たる講堂は寺院大坊内の客殿を、各学寮は支院の坊舎の建築形態を継承したものであることを明らかにしている。

第7章は結語である。

以上要するに本論文は、日蓮教団寺院における伽藍と建築を、日蓮の伽藍観を基本として類型化し、その後の変遷の全容を体系的に明らかにしたもので、建築史学ならびに建築計画学の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は工学博士の学位論文として合格と認める。